護計画にどのように生かしていくか，さらに患者の QOL を目指した継続的な看護が課題と考えている．

A－15）Technetium-99m Mercaptoacetyltriglycine を用いたレノシンチグラフィーと排尿時代用膀胱シンチグラフィーによる代用膀胱造設術後の腎機能と代用膀胱機能の検討

西山　勉・照沼　正博（長岡中央綜合病院泌尿器科）

【目的】自排尿型代用膀胱造設患者の腎機能と代用膀胱機能を Technetium-99m Mercaptoacetyltriglycine（^{99m}Tc-MAG3）を用いたレノシンチグラフィーと排尿時代用膀胱シンチグラフィーを行い，検討した．【対象ならびに方法】対象は膀胱癌で膀胱全摘除術後に代用膀胱を造設された患者10例（男８例，女２例）である．方法は ^{99m}Tc-MAG3 を用いたレノシンチグラフィーと排尿時代用膀胱シンチグラフィーにより代用膀胱造設術後の腎機能と代用膀胱機能の検討した．【結果】腎機能では18腎中16腎で正常パターンを示した．術後１カ月半の１例２腎で拡張非閉塞型を示した．排尿時代用膀胱シンチグラフィーのパターンは尿流量測定のパターンと一致していた．残尿量は排尿量と排尿前後の代用膀胱部分の RI 量から計算できた．【結語】本検査は両機能を比較的簡便に評価でき，代用膀胱造設術後患者の経過観察に有用と思われた．

A－16）進行精巣腫瘍における自家造血幹細胞移植併用高用量化学療法の検討

谷川　俊貴・冨川　善彦
今井　智之・斉藤　和美
斉藤　俊弘・片桐　明善
高橋　公太（新潟大学泌尿器科）
西山　勉（厚生連中央綜合病院泌尿器科）
岸　賢治（新潟大学第一内科）

我々は，新潟大学医学部泌尿器科において進行精巣腫瘍８例に対し自家造血幹細胞移植併用高用量化学療法を施行した．年齢は３才から42才までで，病期は初発例では ⅢB2：４例，ⅢC：２例で，再発例の再発部位は１例は後腹膜，縦隔，両肺，脳で１例は後腹膜，両肺であった．高用量化学療法は，carboplatin 1,000～1,600 mg/m^2，etoposide 1,000～1,600 mg/m^2，cyclophosphamide 1.0～1.2 g/m^2 を５日間に分けて投与した．造血幹細胞移植は第８日に行い，第９日より rG-CSF を末梢血白血球数が 10,000/μl 以上になるまで投与した．移植に用いた造血幹細胞は，自家骨髄のみ３例，末梢血幹細胞のみ３例，自家骨髄と末梢血幹細胞併用が２例で，移植した CFU-GM 数は 1.3～10^5～4.7～10^6/kg であった．

治療効果は，１例で治療関連死となったが，CR ３例，PR ３例，NC １例であった．骨髄機能の回復は，白血球数が 1,000/μl 以上になるまで７日から12日で，血小板数が 50,000/μl 以上になるまで10日から27日を要した．

Ⅱ．一　般　演　題　B　悪性リンパ腫

B－1）当科における悪性リンパ腫の臨床的検討

田中　彰・土持　眞
又賀　泉（日本歯科大学新潟歯学部第二口腔外科）
柴崎　浩一（同　内科）
浅見　恵子・内海　治郎（新潟県立がんセンター新潟病院小児科）

当科開設以来20年間（1975～1994）に日本歯科大学新潟歯学部附属病院第２口腔外科を受診した悪性リンパ腫患者は16名（一次症例，その他６名）で，全悪性腫瘍患者に占める割合は 3.6％であった．一次症例10例全例が NHL で，その初発部位は節性が２例，節外性が８例，節性の全例が頸部リンパ節であった．また節外性は鼻腔・副鼻腔の上顎洞が２例，ワルダイエル輪に属する軟口蓋が２例，唾液腺が耳下腺で１例，口腔は上顎歯肉，硬口蓋，頬粘膜がそれぞれ１例であった．病理組織学的に LSG 分類で検討すると Diffuse large cell type が４例で最も多く，部位的には軟口蓋，耳下腺，上顎歯肉，上顎洞であった．また Diffuse medium-sized cell type が２例で硬口蓋，軟口蓋であった．Follicular Lymphoma は１例のみで large cell type の頬粘膜であった．

B－2）上顎洞を原発とする悪性リンパ腫の１例

五島　秀樹・鈴木　克也
高田　真仁・野村　務
河野　正己・新垣　晋（新潟大学歯学部第一口腔外科）
若林　昌哉（新潟大学第二内科）

今回我々は，化学療法，放射線治療に対して抵抗性の